

No.	⑥	分類	3-(1)-ア	資料名	前へ	学年	1・2年	領域	道徳	2-(2)
-----	---	----	---------	-----	----	----	------	----	----	-------

1 ねらい

- 障害のある人の願いを知り、互いに助け合って生きていこうとする気持ちを持ち、実践する力を身につける。

2 趣旨

- 本資料は、中学校時代に卓球の選手として活躍した主人公が、その後難病を発症し絶望的な気持ちになりかけたが、卓球を通して生きる希望を見出し、また、中学校時代からの仲間たちの支えもあって前向きに生きている姿を描いている。
- 主人公と仲間たちは、共に生きる姿勢でお互いを高め合って生きている。誰もが共生できる社会の実現に向けて、自分にできることを考えさせたい。

3 配慮事項

- 学級に、障害のある生徒や障害のある家族がいる生徒が在籍する場合は、事前にその気持ちを聞いてみるなど十分に配慮する必要がある。

4 展開例

学 習 内 容	指 導 上 の 留 意 点
1 同じ目標に向かって努力をしている仲間について考える。	・これまでの経験も踏まえ、悩みを打ち明けられるような友だちの存在について考えさせる。
2 「彼女」の気持ちを考える。 ○大好きな卓球に打ち込んでいた時 「彼女」はどんな思いで部活動に取り組んでいたのでしょうか。	
・うまくなりたい。強くなりたい。 ・高校でも活躍したい。 ○病気が分かった時 病気が分かった時、どんなことを考えたのでしょうか。	・目標をもって一生懸命練習に励み、充実した生活を送っていたことを押さえる。
・もう卓球ができないのか。 ・健康な体にもどりたい。 ・何で私だけがこんな目に遭うのか。	・「生きる希望を失いかけた」を手がかりに、悩み、苦しんだことを想像させる。
3 「彼女」が障害を乗り越えて生きてきた力の源について考える。 前向きに生きられるようになったのはどうしてでしょう。	
・卓球を通して、心が強くなっていた。 ・支えてくれる人が周りにいた。 ・「彼女」も仲間も、互いに勇気をもらい高め合えた。	・常に前を向いて物事を考える彼女の様子に着目させる。 ・本人の気持ちが強かったことに加え、仲間の存在も原動力になっていることを捉えさせる。
4 共生社会の在り方について考える。 卓球部の仲間たちについて、どんなことを感じますか。	
・「彼女」が病気のことで遠慮をしているときには励ますなど、自分のこととして考えている。 ・障害の有無にかかわらず、共に生きる思いをもって付き合っている。 ・一緒に苦労した仲間は、一生付き合っていけるのかもしれない。	・部活動の仲間たちの姿を通して、共生社会の形成に向けて、必要なことや自分にできることを考えさせたい。

私がここにいるのは、スポーツによって救われたからです。スポーツは私に人生で大切な価値を教えてくださいました。それは、2020年東京大会が世界に広めようと決意している価値です。

19歳のときに私の人生は一変しました。私は陸上選手で、水泳もしていました。また、チアリーダーでもありました。そして、初めて足首に痛みを感じてから、たった数週間のうちに骨肉種により足を失ってしまいました。もちろん、それは過酷なことで、絶望の淵に沈みました。

でもそれは大学に戻り、陸上に取り組むまでのことでした。私は目標を決め、それを越えることに喜びを感じ、新しい自信が生まれました。そして何より、私にとって大切なのは、私が持っているものであって、私が失ったものではないということを学びました。

私はアテネと北京のパラリンピック大会に出場しました。スポーツの力に感動させられた私は、恵まれていると感じました。

2012年ロンドン大会も楽しみにしていました。しかし、2011年3月11日、津波が私の故郷の町を襲いました。6日もの間、私は自分の家族がまだ無事であるかどうかわかりませんでした。そして家族を見つけ出したとき、自分の個人的な幸せなど、国民の深い悲しみとは比べものにもなりません。

私はいろいろな学校からメッセージを集めて故郷に持ち帰り、私自身の経験を人々に話しました。食糧も持って行きました。ほかのアスリートたちも同じことをしました。私達是一緒になってスポーツ活動を準備して、自信を取り戻すお手伝いをしました。そのとき初めて、私はスポーツの真の力を目の当たりにしたのです。

新たな夢と笑顔を育む力。

希望をもたらす力。

人々を結びつける力。

200人を超えるアスリートたちが、日本中から、そして世界中から、被災地におよそ1,000回も足を運び、5万人以上の子どもたちを励ましています。私たちが目にしたものは、かつて日本では見られなかったオリンピックの価値が及ぼす力です。そして、日本が目の当たりにしたのは、「卓越、友情、尊敬」が、言葉以上の大きな力をもつということです。

パラリンピック

日本において障害者スポーツが広まった契機は、1964年に日本で開催された東京パラリンピックです。各国の選手たちが生き生きとスポーツをする姿に、日本の障害者や医療関係者、福祉関係者は深い感銘を受け、日本でも障害者スポーツを盛んにしようとする動きが高まりました。そして、翌年には国民体育大会が開催された地で身体障害者の全国スポーツ大会が開催されるようになり、次第に訓練の延長としてではなく、スポーツをスポーツとして楽しむという意識が生まれてきました。

さらに、1998年に開催された長野パラリンピック冬季競技大会では、日本選手団のめざましい活躍が深い感動を呼び、マスメディア等を通じて広く国民が障害者スポーツの競技性を認識し、関心をもつこととなりました。

1960年の第1回ローマ大会の参加国は23カ国、参加人数は400人でしたが、2012年ロンドンパラリンピックの参加国は164カ国、参加人数は4,310人となりました。

パラリンピックに出場するためには、

- ①大会で定められた標準記録を突破
- ②世界ランキングの上位に入り出場権を獲得
- ③世界選手権大会や地域選手権大会で出場権を獲得

などの厳しい条件をクリアしさらに国内の競技団体に選考されなければなりません。世界のトップアスリートだけが出場できる国際競技大会です。実施競技は、以下の通りです。（夏季…第14回、冬季…第11回 現在）

夏季：陸上競技、水泳、車いすテニス、ボッチャ、卓球、柔道、セーリング、パワーリフティング、射撃、自転車、アーチェリー、馬術、ゴールボール、車いすフェンシング、ボート、車椅子バスケットボール、視覚障害者5人制サッカー、脳性麻痺者7人制サッカー、ウィルチェアーラグビー、シッティングバレーボール

冬季：アルペンスキー、クロスカントリースキー、バイアスロン、アイススレッジホッケー、車いすカーリング



パラリンピックシンボル
心・肉体・魂を表現している。

スペシャルオリンピックス

1968年、故ケネディ大統領の妹ユニス・シュライバーは、当時スポーツを楽しむ機会が少なかった知的発達障害のある人たちにスポーツを通じ社会参加を応援する「スペシャルオリンピックス」を設立しました。現在は、スポーツトレーニングとその成果の発表の場である競技会を年間を通じ提供している国際的なスポーツ組織となっています。

2015年には第14回夏季世界大会がロサンゼルス（アメリカ）で、2017年には第11回冬季世界大会がシュラートミンク（オーストリア）で開催される予定です。夏季競技は15競技、冬季競技は7競技を実施しています。